

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13188

研究課題名（和文）格の省略がもたらす意味解釈への効果に関する理論研究

研究課題名（英文）A Study of Semantic Effects Induced by Case Particle Omission

研究代表者

杉村 美奈（Sugimura, Mina）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：20707286

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、名詞句の格助詞が省略されることにより、意味解釈にどのような影響が生じるのかを明らかにすることを研究課題とし、格認可に深く関わる複雑述語（complex predicates）形成メカニズムの明示を試みたものである。研究の結果、格省略により生じる意味解釈の差は、名詞句の現れる統語的位置と複雑述語形成の方法に關与するということが明らかになった。また、複雑述語がどのように形成されるのかは、述語の組み合わせによって異なることを形態・統語的側面から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

名詞句のもつ「が」や「を」のような格がどのように認可されるのかという問いは、言語理論において重要な位置付けにある。本研究では、格認可のしくみを明らかにし、その上で、格助詞の省略がどのような意味効果をもたらすのかという問いを探求した点で、統語論・意味論のインターフェース研究の発展に寄与すると言える。また、格認可に關与する複雑述語形成という形態部門にも深く關与する現象を統語的に捕らえることにより、形態論・統語論のインターフェース研究の進展にも貢献すると言える。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to illuminate the nature of case particle omission and its semantic effects. It also focused on revealing the mechanism of complex predicate formation, which is crucial for case-licensing. The study has claimed that interpretive differences triggered by case particle omission are associated with the structural position of a relevant noun phrase, which in turn depends on how a relevant complex predicate is formed. In addition, the study has also shown from a morpho-syntactic aspect that how a given complex predicate is formed varies depending on the combination of predicates.

研究分野：統語論

キーワード：格省略 格認可 複雑述語形成 作用域 焦点

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

格が形態的に現れる日本語のような言語において、生成文法理論では、格が認可される統語的位置と意味解釈との関連性についての観察、議論が活発に行われてきた。特に可能接辞「られ」、とり立て詞「だけ」と共起する目的語の作用域については、様々な分析 (Tada 1992, Koizumi 1994, Takano 2003 他) が提案されてきた。

一方、格認可に密接に関与する複雑述語がどのように形成されるのかという問題については未だに議論の余地があり、音韻形態部門における形態的融合 (morphological merger) によって形成される (Shibata 2015, *PhD. diss.*) のか、あるいは統語部門の最初の派生の段階で形成され、意味部門で編出 (excorporation) される (Saito 2012) のかといった、異なる立場がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、格助詞の有無がもたらす意味解釈への影響を明らかにすることにある。また、その目的を遂行するために、格認可に関わる複雑述語 (complex predicates) と目的語との作用域関係を整理し、複雑述語がどのように形成されるのかを明らかにする。

具体的には、まず、Shibata (2015, *PhD. diss.*) の提唱する複雑述語形成メカニズムの考察を通し、特に、「が」格目的語と「を」格目的語における格助詞の省略と意味解釈との相互関係を捉え直す。一方で、Saito (2012) の分析を通し、目的語の格認可メカニズムと意味解釈との関係を明らかにする。これらの考察を通し、本研究は形態論・統語論・意味論の各インターフェース研究に新たな洞察を与えることを目標とする。

3. 研究の方法

動詞 + 「られ」、動詞 + 「ない」の組み合わせで形成される複雑述語と「が」格目的語、「を」格目的語との作用域関係についての言語事実を格助詞の有無に注目し、整理する。一方で、再構築化 (restructuring) 現象が観察される *V-ni ik/ku* (e.g. 「食へに行く / 来る」) 構文 (Miyagawa 1987) やそれに一見類似する *go get* 構文 (Zwicky 1969, Shopen 1971, Carden & Pesetsky 1977, Pullum 1990 他) などの比較研究を通し、形態・統語的観点から複雑述語形成メカニズムの解明を行う。同時に、複雑述語形成が起こる文法のレベルについても格助詞の有無による名詞句と複雑述語との作用域関係から探る。

4. 研究成果

格助詞の有無がもたらす意味解釈への影響および格認可に関わる複雑述語形成のメカニズムについて、以下の成果が得られた。

(1) 目的語と複雑述語との間の作用域関係

格助詞の省略によって生じる目的語と複雑述語との間の作用域関係を考察するにあたり、可能接辞「られ」と、とり立て詞「だけ」との間の作用域 (Tada 1992, Takano 2003 他) および論理接続詞「か」、否定辞「ない」との間の作用域 (Shibata 2015, *JEAL*, Shibata 2015, *PhD. diss.* 他) を先行研究の考察をもとに整理し、言語事実の説明を試みた。

Shibata (2015, *JEAL*, fn.59) では、目的語の格助詞の省略により、通常とは逆の作用域が優勢となる事実が指摘されている。この観察をもとに、下記の言語事実における格助詞の省略と作用域の関係を整理した。

- (i) a. 太郎はパンだけが食べられる。(obj > can, (*) can > obj)
b. 太郎はパンだけを食べられる。(??)obj > can, can > obj
- (ii) 太郎はパンだけ \emptyset 食べられる。(only > can, can > only) (Sugimura 2020: 62)

先行研究では、(ia)では、「だけ」を伴う「が」格目的語が「られ」よりも広い作用域をとる解釈 (i.e. 「パンしか食べられない」という解釈) が優勢であるのに対し、(ib)では、「を」格目的語に付加する「だけ」よりも「られ」の作用域が広い解釈 (i.e. 「他のものは食べずにパンのみ食べられる」という解釈) が優勢となることが観察されてきた (Tada 1992, Koizumi 1994, Takano 2003 他)。しかし、目的語から格助詞が省略された(ii)では、そのような作用域の優勢性は見られず、どちらの解釈も同等に得られることが分かる。

一方、「ない」との作用域関係については、以下 (iii a, b) の事実が先行研究で観察されている。

- (iii) a. 太郎はパンだけを食べなかった。(obj > neg; neg > obj)
b. 太郎はパンだけ食べなかった。(obj > neg; ?*neg > obj) (see Shibata 2015 *PhD. diss.*)

(iii a)では、「を」格名詞句は否定辞「ない」に対し、広いスコープも狭いスコープもとることができる (Koizumi 1994) が、(iii b)では、格助詞が省略された目的語は「ない」よりも広いスコー

プをとらなければならない (Shibata 2015, *Ph.D diss.*)

では、なぜ、(ii)と(iib)において格省略が起こった場合の名詞句のとり作用域が異なるのかという問いが生じる。この点において、本研究では、Sugimura (2012) の複雑述語形成における格付与メカニズムを踏襲し、格助詞が省略された名詞句の目的語位置での認可には主要部移動を伴う複雑述語形成が必要であるという提案をした。一方、否定辞を含む複雑述語は V から否定辞への主要部移動ができない (Kishimoto 2007) と仮定し、その結果、格助詞が省略された名詞句は通常の目的語位置に現れることができず、TP 領域に生起する (cf. Koizumi 1994, Miyagawa 2001) と主張した。したがって、(iib)では、目的語は必然的に「ない」よりも広い作用域をとることになり、(ii)では目的語が「られ」よりも狭い作用域をとることができるということになる。一方、目的語が「られ」よりも広い作用域をとることができるという事実に対しては、(a) TP 領域に直接生起する、または、(b) QR (Takahashi 2010) の可能性があるとした。

したがって、本研究では格助詞を伴う名詞句と伴わない名詞句の統語位置が異なる可能性を指摘し、複雑述語形成には主要部移動が関与するという立場を支持した。一方で、主要部移動が阻止された場合には形態的融合 (morphological merger) が必要であるため、この点においては Shibata (2015) の分析を支持する結果となった。以上の研究成果を The 10th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure: Universals and Variables (Phex 10) で発表し、論文の形にまとめた。

(2) 複雑述語形成の日英語比較

V-ni ik/ku 構文における再構築現象

V-ni ik/ku (e.g. 「食べに行く / 来る」) のような移動動詞を伴う複雑述語形成および、Miyagawa (1987) による再構築 (restructuring) 現象に注目し、宮本陽一氏 (大阪大学) との共同研究において、可能接辞「られ」と Focus 主要部の複合体が、目的語の「が」格認可に関わっていることを提案した。

具体的には、Miyagawa (1987) が観察しているように、(ia) のように「に」句 (目的節) が再構築動詞「行く」に隣接している場合は再構築が起こり、「が格」目的語が「行ける」の可能接辞「られ」により認可されるのに対し、(ib) のように副詞などの介在により、隣接条件が満たされない場合には、再構築が阻止され、「られ」による「が格」認可が行われないという言語事実の検証を行った。

- (i) a. 太郎は歩いて[本が買いに]行ける。
b. *太郎は[本が買いに]歩いて行ける。

まず、宮本氏との共同研究では、言語事実として、(ib) では「が格」目的語が隣接条件の違反により認可されないのに対し、(ii) では「が格」目的語が認可されているという事実を提示した。

- (ii) 本が_i 太郎は [t_i 買いに]歩いて行ける。(Sugimura & Miyamoto 2021)

なぜ(ii)では「に句」と「行ける」との隣接条件が満たされていないにも関わらず、「が」格目的語が認可されるのかという問いに対し、本研究では、「が」格名詞句が CP 領域への焦点化移動 (focus movement) をすることによって認可されるという提案をした。より厳密には、可能接辞「られ」と Focus 主要部が移動により複合体を形成することにより、「が」格の認可が行われることを提案し、先行研究で観察されている、九州方言における主格名詞句と Focus の関係 (Kato, 2007; Fukuda, 2008, Nishioka 2010) からこの主張が支持されることを示した。本研究成果を日本英語学会国際春季フォーラム 2021 (The English Linguistic Society of Japan 14th International Spring Forum) において、宮本陽一氏と共同発表した (Sugimura & Miyamoto 2021)。

さらに、宮本氏との研究成果を発展させ、上記の焦点化移動と可能接辞との複合体、より正確には、V-ni-ik-e-ru (e.g. 「食べに行ける」) という複雑述語全体の形成方法を主要部移動で捉えるのではなく、Saito (2012) による、併合と LF 編出 (excorporation) の組み合わせによる複雑述語形成 (cf. Shimada 2007, Tonoike 2009) として分析した。この分析により、Miyagawa (1987) による再構築現象を現ミニマリスト理論において捉え直すことが可能となる。この研究の成果を論文の形にまとめ、国際誌に投稿した (Sugimura & Miyamoto, 査読中)。

go get 構文における複雑述語形成

V-ni ik/ku 構文に一見、類似しているように思われる英語の go get 構文について、小畑美貴氏 (法政大学) との共同研究において、屈折接辞と複雑述語形成との関係を捉えることを研究課題の中心とし、分析した。当該の構文では、*goes get, *goes got, *go gets, *went get のように V₁, V₂ のいずれの動詞に屈折接辞が現れても非文法的となることが先行研究 (Zwicky 1969, Shopen 1971, Carden & Pesetsky 1977, Pullum 1990 他) で指摘されてきた。この事実に対し、Bjorkman (2010) は、非定形素性 [infinitive] の浸透 (percolation) という操作 (cf. Matushansky 2008) を仮定した統語・形態論的アプローチにより、go get 構文の形態・音韻の性質および統語・意味的性質を捉えている。

この分析に対し、本研究では go get 構文における動詞複合体は外的併合による複雑述語形成

の結果、 $\langle V_1, V_2 \rangle$ というラベルをもつ (cf. Citko 2008) という仮定のもと、*go get* は、いずれも等しく時制接辞を具現化しないといけないという制限が課されることを提案した。一方で、時制の主要部 T と動詞は一对一の関係を持たなければならない (Jaeggli and Hyams 1993, Pollock 1994, Bjorkman 2016) ため、*go get* 構文における 2 つの動詞が両方とも時制接辞を具現化することはできない。その結果、*go get* 構文は両方の動詞ともに接辞が現れない「原形」の形のみ許容されるということになる。

また、日本語の「乗り降り(する)」のような並列複合動詞が英語の *go get* 構文に対応する複雑述語であるという可能性を指摘し、本研究を日本英語学会第 39 回大会シンポジウムにて口頭発表した (杉村・小畑 2021)。その内容を発展させ、論文の形にまとめた研究成果が国際誌 *Studies in Generative Grammar* 33 に掲載された (Sugimura & Obata 2023)。

本研究の成果から、日本語の *V-ni ik* 構文と英語の *go get* 構文は異なるメカニズムで述語形成が行われる一方で、日本語では並列タイプの V-V 複合が英語の *go get* 構文と同じメカニズムで形成されるということが結論付けられる。

(3) VN (Verbal Noun) スル構文における格省略

本研究では、複雑述語である VN スル構文 (e.g. 「勉強する」) にも注目し、中でも、口語体における格省略に注目し、分析をした。具体的には、「英語の勉強をする」のような文から「を」格を省略した、口語体としての VN スル (e.g. 「英語の勉強する」) と、「英語を勉強する」のような文に現れる文章語としての VN スルをそれぞれ K(ase)P 仮説 (Travis & Lamontagne 1992; Fukuda 1993) をもとに分析し、K の格省略と口語体の解釈が関連している可能性を指摘した。具体的には、「勉強」のような VN は通常、「スル」と共に「勉強する」のような動詞を形成することも、「勉強を」のように「を」格を伴う KP として具現化することも可能であるが、口語表現としての VN スル (e.g. 「英語の勉強する」) では VN は名詞化された動詞 (Kamiya 2005) として現れ、KP 構造をもつとした。また、この場合の口語体の解釈は、VN が動詞「スル」に編入せず、K 主要部から「を」格が省略されることにより生じるという提案をした。本研究の成果は、日本言語学会第 167 回大会・ポスター発表において発表した (杉村 2023)。

(4) 複雑述語における屈折接辞の役割と複雑述語形成の起こる文法レベル

研究成果(2)にも関連するが、日本語のような膠着言語では、「歩かせられなくなっただろう」(*aruk-ase-rare -ta.ku# na.kat -ta# daroo* (影山 2018: 17)) のように、屈折接辞が一つの述語に対し、「数珠つなぎ」(影山 2018: 1) のように現れる。影山 (2018) は、複雑述語形成において、各接辞は付加先の語幹と選択関係にあること、また、屈折形態の情報は語彙部門に特有のものであること、さらに、句境界 (i.e. #) をマークする願望接辞の「たい」や過去時制の「た」に関しても、先行する述語形態と選択関係にあることから、複雑述語形成における屈折接辞は複雑述語における「膠」の役割をしており、それにより形態 - 統語部門との橋渡しをしている、つまり、複雑述語形成における形態論的制約は語彙部門、統語部門のいずれにも適用するという「モジュール形態論」の立場をとっている。

これに対し、Saito (2014), Sugimura & Obata (2016, 2018) のような先行研究では、「押し倒す」のような語彙的複合動詞も含め、V-V 複合は一貫して統語部門で形成されるという立場をとっている。これらの先行研究を踏まえ、複雑述語形成において、影山 (2018) の主張する、形態 - 統語部門へのアクセスを示唆する現象を統語部門のみのアクセスで説明する立場について、影山 (2018) が掲載されている『レキシコン研究の新たなアプローチ』(岸本秀樹・影山太郎(編))の書評において言及した。本書評は、*English Linguistics* 38 に Review として掲載されている。

(5) 関西方言における格助詞省略

森田千草氏 (帝京大学短期大学) との共同研究において、関西方言と東京方言において両方言とも格助詞の省略には「が格」と「を格」の連動が見られることが明らかとなった。一方で、関西方言では補文標識「と」が省略できる (Saito 1983) ことや、主節動詞の時制や相により影響受ける可能性もあるということが分かった。

一方で上記の言語現象についてのフィードバックを研究協力者の宮本陽一氏 (大阪大学) に求めたところ、格助詞省略文が新情報としての文を導入するように、言語データを整理し直す必要があるという指摘を受けた。この点を含め、新たな観点からデータを観察することが今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Mina Sugimura	4. 巻 38-2
2. 論文標題 [Review] Rekishikon Kenkyu no Aratana Apurochi (New Approaches to Lexicon Research)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 287-296
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mina Sugimura	4. 巻 5
2. 論文標題 Case particle omission and the position of objects in Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Phonological Externalization	6. 最初と最後の頁 55-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mina Sugimura & Miki Obata	4. 巻 33
2. 論文標題 How Labels Affect Morpheme Realization: A Study of V-V Sequences	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in Generative Grammar	6. 最初と最後の頁 215-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15860/sigg.33.2.202305.215.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 杉村美奈・小畑美貴
2. 発表標題 ラベルと形態素の具現化の関係 動詞連結を中心に
3. 学会等名 日本英語学会第39回大会・シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mina Sugimura and Yoichi Miyamoto
2. 発表標題 On the location of nominative objects: focus movement-based approach
3. 学会等名 English Linguistic Society of Japan 14th International Spring Forum 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mina Sugimura
2. 発表標題 Case particle omission and the position of objects
3. 学会等名 The 10th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure: Universals and Variables (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉村美奈
2. 発表標題 VNスル構文の口語表現における格助詞省略
3. 学会等名 日本語学会第167回大会・ポスター発表
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	宮本 陽一 (Miyamoto Yoichi)	大阪大学・人文学研究科・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------